第２章　マテンゴ語の背景

2.1. マテンゴ語の概要

2.1.1. マテンゴ語話者と話されている地域

マテンゴ語は，タンザニアの西南端，マラウィ湖の東岸中央部に位置するンビンガ県で話されている。ンビンガ県の南の境界はモザンビークとの国境，西の境界はマラウィとの国境である。マテンゴ語話者の居住地は，県中西部の「マテンゴ・ハイランド」と呼ばれる山岳地帯である。季節は，５月上旬から11月中旬までの乾期と，11月下旬から４月下旬までの雨期とに分かれている。ンビンガ県に居住している主な民族は，マテンゴ人の他に，湖岸のパングア(Pangwa)人，ニャサ(Nyasa)人，東部のンゴニ人，南東部のヤオ人，などである。独立後のタンザニアでは民族別のデータがいっさい発表されていないため，マテンゴ人の正確な人口は不明である。1957年の人口統計資料が最後の民族別資料であるが，それによると，マテンゴ人の人口は5.9万人となっている（Polomé 1980:4)。これに人口増加率を考え合わせると，現在，約16万人と推測される。大半がローマ・カトリックの信者である。

マテンゴ人は農業を生業とする。山の斜面に格子状の畝をはりめぐらせた「ンゴロ」“ íŋgɔlɔ / ŋgɔ̂lɔ”[1]と呼ばれる独特の畑で，主食であるトウモロコシやインゲン豆の栽培を行なっている。この農法は集約性が高いことで知られている。マテンゴ語にはンゴロ農法の各行程に対する固有の用語があることから，この農法がマテンゴ人にとって重要な意味をもつことがうかがえる。換金作物としては，コーヒーが栽培されている。1930年頃キリマンジャロ（Kilimanjaro）州からアラビカコーヒーの栽培が持ち込まれ，次第に広く普及していった。現在では，ンビンガ県は，タンザニアの重要なコーヒー生産地のひとつに数えられる。

2.1.2. 歴史的背景

「マテンゴ」という民族名は，マテンゴ語の “kitɛŋgu” 「森」に由来し，「森の人々」を意味するが（Ebner 1987:43），この「マテンゴ」という民族のまとまりが現在のように明確になってから，まだ 150年ほどしかたっていない。

---

1 “　” 内の表記は本論文で用いるマテンゴ語の表記法（3.5.参照）による。以下，本文中で用いるマテンゴ語の単語の表記については同様である。

当時，現在のマテンゴ人居住地の東に位置する平野に，言語や習慣が似ている人々が拡散して暮らしていたが，19世紀中頃，南部アフリカからンゴニ人の侵攻を受け，東に逃れた人々は「ンデンデウレ」と呼ばれる民族としてまとまり，西の山岳地帯へ逃げた人々が「マテンゴ」としてまとまったと考えられている（Ebner 1987:46, Gulliver 1955:27）。ンゴニ人の攻撃を受ける前は，マテンゴ人には全体を統治するような指導者がいたわけでもなく，グループとしての強い意識があったわけでもない（Gulliver 1955:27）。従って，「マテンゴ」という民族グループは，起源や政治的単位などを長年にわたって共有していたことからではなく，他者の攻撃から自分たちを守ることをきっかけに形成されたと言える。マテンゴ人たちのアイデンティティの指標とされるンゴロ農法も，山岳地に追いやられた際に，傾斜のきつい斜面での農耕を余儀なくされたことから生み出されたと言われている（Stenhouse 1944:22）。

2.1.3. 言語系統

マテンゴ語は，アフリカ大陸赤道以南で広く話されているバンツー諸語のひとつである。アフリカの言語は系統的に，ニジェール・コンゴ語族（Niger-Congo），ナイル・サハラ語族（Nilo-Saharan），アフロ・アジア語族（Afro-Asiatic），コイサン語族（Khoisan），の４語族に分けられるが，バンツー諸語は，ニジェール・コンゴ語族に属する。バンツー諸語は，Guthrie（1948）以来，アルファベットと２桁の数字で分類される。そこではマテンゴ語はN13と分類されている。N10番台はマンダ（Manda）語群と呼ばれるグループで，ここには他に，マンダ語（N11），ンゴニ語（N12），ンポト（Mpoto）語（N14），トンガ（Tonga）語（N15），が属している。

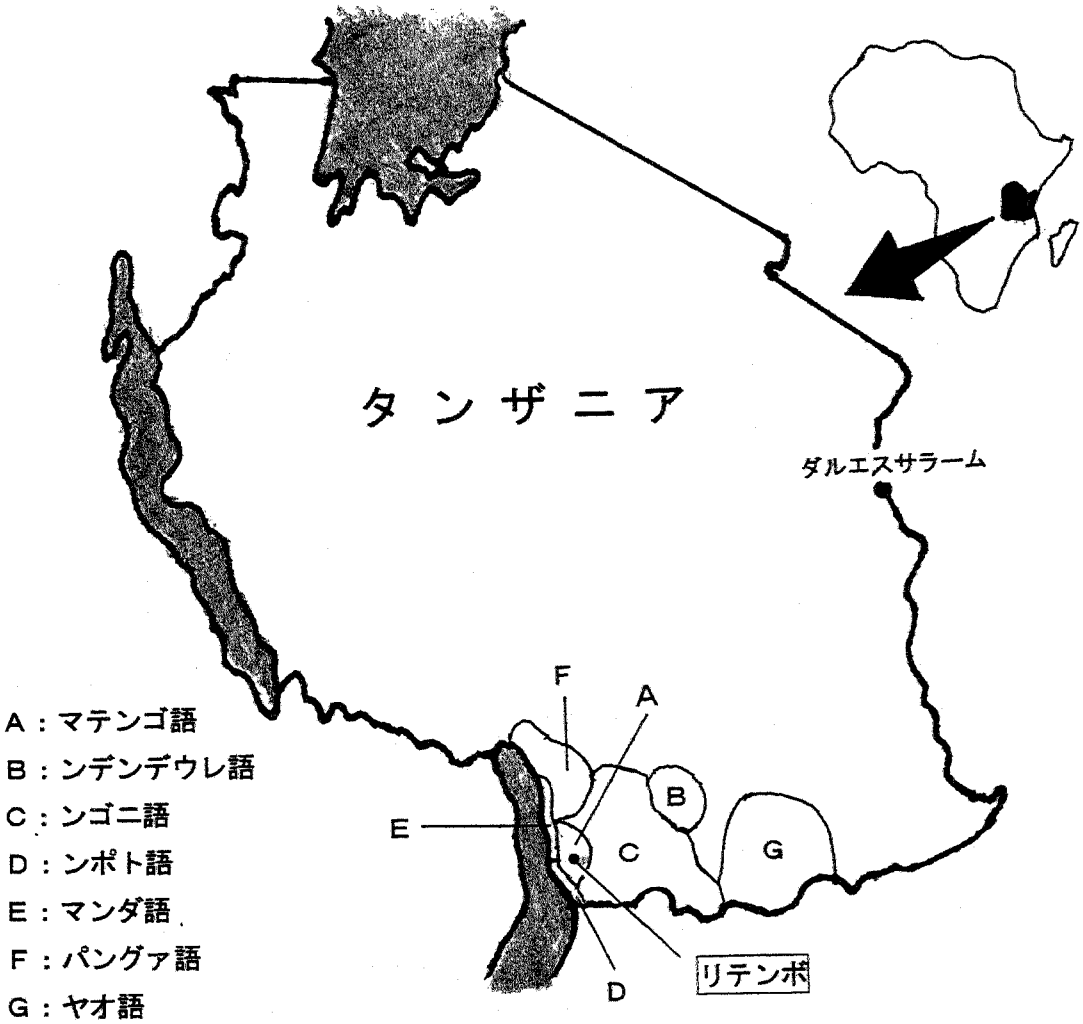
一般的にマテンゴ語話者の間では，Guthrie（1948:59）がN14に分類してるンポト語はマテンゴ語の変種であると考えられている。これについてはンポト語話者も同様に考えているようである。しかしながら，ンポト語に関する資料がないことから，確かなことは言えない。ンデンデウレ語は，Guthrie（1948）では取り上げられてないが，歴史的に見ればマテンゴ語とはかなり近いと考えられる。ンデンデウレ語とマテンゴ語の類似性については，Ngonyani（1988）が言語統計学的[2]に比較した結果として，71.5%の語彙の共通性を報告している。

---

[2] Ngonyani氏の比較の方法は，基礎語彙200語を比較して，２言語間の単語が共通していれば５点，同じ単語に由来しているが音韻的な違いがある場合はその違いの程度に応じて４点～２点，同じ単語に由来している可能性がわずかでもあるものは１点，明らかに異なる単語である場合は０点，として計算する。1000点を満点として，%をだす。

人々が「マテンゴ語」と呼んでいるものは，音韻や語彙から大きくふたつに分けられる。ひとつは本論文が扱っている変種で，リテンボを中心としたマテンゴ・ハイランドで話されている。もうひとつはマテンゴ・ハイランドの東部に位置する低地，ンパパ周辺で話されている変種である。これらの間には，語彙の違いや，閉鎖音の交替を中心とする音韻的な違いが見られる。ただしマテンゴ・ハイランドから低地への人口の移出が目立ってきたのは 1960 年頃になってからで（加藤 1999），古くからこの地域に住むンパパ変種の話者の数は限られている[3]。

＜ 図１： マテンゴ語が話されている場所と周辺言語 ＞



[3] この地域は，マテンゴ・ハイランドからの移住者が来るよりもずっと以前から，モザンビークからの移住者やンゴニ人をはじめとするマテンゴ人以外の移住者が住んでいた（加藤 私信）。従って，言語接触の状況がマテンゴ・ハイランドとはかなり異なっていると思われる。

2.2. マテンゴ語の社会言語学的状況 [4]

タンザニアでは，130 を越える民族語（Grimes 1996:404）に加えて，「国家語」であるスワヒリ語，旧宗主国の言語であり「公用語」のひとつでもある英語が話されている。多言語国家であるタンザニアの言語状況は，ダイグロシア [5]，つまり，スワヒリ語，英語，民族語の用途や使用領域は相補分布し，これらの言語は摩擦なく共存していると言われてきた（O'Barr 1971, Abdulaziz 1972, Heine 1976, Polomé 1980, Fasold 1984 他）。しかしながら，スワヒリ語の浸透に伴って，それぞれの用途の境界は曖昧になり，この関係は次第に崩れてきていることが近年の研究で報告されている（Batibo 1992, Mekacha 1993, 米田 1995 他）。まず，マテンゴ語の社会言語学的現状について，米田（1995）が報告している調査結果を基にして，マテンゴ・コミュニティにおける言語使用，言語運用能力，言語意識という点から検討してみよう。この調査は，マテンゴ・コミュニティを例にして，スワヒリ語の浸透がタンザニアの民族語にどのような影響を与えているかを調べたものである。調査地は，ンビンガ県の中心地であるンビンガ・ムジニ（以下ンビンガ）と，村落部であるリテンボである。ンビンガはンビンガ県の県庁所在地で，マテンゴ人以外の民族も多数住んでいる。それに対してリテンボは他地域から派遣されている行政役人以外の住民はほとんどがマテンゴ人である。被験者は，ンビンガから 45 人，リテンボから 50 人のマテンゴ人で，年配層（50 歳以上），中年層（30～49），若年層（20 代半ば以下）の３グループに大別してある。ここでは調査結果のみを引用するが，調査の方法，問題点とそれに対する対策など，調査の詳細については米田（1995）を参照されたい。

2.2.1. 言語使用

2.2.1.1. 家庭

表１は「あなたは家族と話すとき主にどの言語を用いますか」という質問に対する回答を，対話者の世代が年配層の場合，中年層の場合，若年層の場合に分けて，それぞれを被験者の世代と居住地別にまとめたものである。

---

[4] ２章２節～４節は「民族語に対する言語政策とその影響－タンザニアの事例から－」（『言語・国家，そして権力』新世社 1997 年）を修正，加筆したものである。

[5] ダイグロシアについては多様な定義がなされているが，「役割の相補分布」という点は，ダイグロシアの核として，いずれの定義でも共通して言われているところである。そこで本論文では，ダイグロシアを「多言語コミュニティにおいて，それぞれの言語の役割が相補分布し，それぞれの領域が安定している状態」と定義する。

＜表１： 被験者の世代／地域別に分類した家族に対する使用言語 (%)＞

1a ： 対話者が年配層の家族の場合

	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	年配層			中年層			若年層		
				ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体
S	7	8	8	0	5	2	7	8	7	10	11	10
MS	45	37	41	78	40	59	43	50	47	18	22	20
M	48	55	51	22	55	38	50	42	46	72	67	70
計	100 (45)	100 (50)	100 (95)	100 (9)	100 (10)	100 (19)	100 (11)	100 (11)	100 (22)	100 (25)	100 (29)	100 (54)

( )は実数

Sはスワヒリ語，MSはスワヒリ語とマテンゴ語の両方，Mはマテンゴ語，を表わす。ただし，MSは，トピックの違いなど会話によってスワヒリ語とマテンゴ語をコード・スウィッチさせるケースとひとつの会話の中でスワヒリ語とマテンゴ語をコード・スウィッチさせるケースの両方を含む。

1b ： 対話者が中年層の家族の場合

	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	年配層			中年層			若年層		
				ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体
S	36	26	31	11	30	21	43	13	28	55	35	45
MS	55	64	60	78	60	69	53	78	66	32	54	43
M	9	10	9	11	21	10	4	9	6	13	11	12
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

1c ： 対話者が若年層の家族の場合

	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	年配層			中年層			若年層		
				ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体
S	59	36	48	44	20	32	73	50	61	59	36	48
MS	37	44	40	44	40	42	27	50	39	41	43	42
M	4	20	20	12	40	26	0	0	0	0	21	10
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

表.1a～cを概観してみると，対話者が年配者の場合には半数がマテンゴ語を用いると回答している。スワヒリ語を用いるという被験者は各地域，各世代とも，１割以下である。しかしながら対話者が中年層や若年層になるとマテンゴ語の使用は激減する。スワヒリ語とマテンゴ語の両方を用いるという被験者もかなりいるが，スワヒリ語を主に用いるという割合とマテンゴ語を主に用いるという割合は，リテンボの年配層の被験者を除けば，対話者が年配層の場合とほぼ逆転している。このように，中年層や若年層の間では，スワヒリ語が，マテンゴ語と同等，あるいはそれ以上に家庭内で用いられていることがわかる。

言語の使用状況には地域差が見られる。ンビンガに比べるとリテンボではマテンゴ語が

まだまだ用いられているようである。ただしこれはあくまでも使用言語がマテンゴ語からスワヒリ語に移行していく速度の問題であって，移行の事実，および移行の方向に違いがあるわけではない。このことを裏付けるのが表２である。

＜表２： 一世代前の家庭での使用言語 （%）＞

	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	年配層			中年層		
				ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体
S	5	0	2	10	0	5	0	0	0
MS	5	10	8	10	10	10	0	10	5
M	90	90	90	80	90	85	100	90	95
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100

表２は20～30年前に家庭で用いていた言語を年配層と中年層の被験者に回顧してもらった結果である。一世代前の家庭では，ンビンガ，リテンボ両地域とも圧倒的にマテンゴ語が用いられている。この時代には家庭での言語使用に地域差は見られない。この時代の言語使用と現在の言語使用を比較すると，言語使用は両地域とも変化していることがわかる。したがって現在の言語使用に見られる地域差は，一方の地域の変化によるものではなく，両地域における変化の速度の違いによるものであると言えるだろう。

2.2.1.2. 民族コミュニティ

表３は「あなたは（世代別に）近隣のマテンゴ人と話すとき主にどの言語を用いますか」という質問に対する回答である。この表から，民族コミュニティではマテンゴ語が用いられる場面は家庭よりもさらに限られてきていることが見て取れる。とくにンビンガでは，マテンゴ語を主要言語とする割合だけではなく，ＭＳを含むマテンゴ語の使用全体が減少している。若者同士の会話になると，同じ民族であるにも拘わらず，マテンゴ語はほとんど用いられていない。

＜表３： 被験者の世代／地域別に分類した近隣のマテンゴ人に対する使用言語 （%）＞

3a ： 対話者が年配層の場合

	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	年配層			中年層			若年層		
				ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体
S	15	9	12	10	10	10	18	10	14	16	7	11
MS	36	31	34	45	30	33	36	26	31	28	38	33
M	49	60	54	45	60	57	46	64	55	56	55	56
計	100 (45)	100 (50)	100 (95)	100 (9)	100 (10)	100 (19)	100 (11)	100 (11)	100 (22)	100 (25)	100 (29)	100 (54)

3b： 対話者が中年層の場合

	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	年配層			中年層			若年層		
				ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体
S	51	24	38	45	0	22	64	9	36	57	38	45
MS	30	60	45	33	80	58	36	91	64	24	41	33
M	19	16	17	22	20	20	0	0	0	24	21	22
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

3c ：対話者が若年層の場合

	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	年配層			中年層			若年層		
				ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体
S	78	24	50	56	10	32	64	18	45	92	31	59
MS	20	70	46	34	80	58	36	73	33	8	66	39
M	2	6	4	10	10	10	0	9	22	0	3	2
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

地域差は被験者と対話者の世代が若くなるにつれて大きくなるが，この地域差は家庭の場合に比べて民族コミュニティではいっそう大きくなる。これは，民族コミュニティの使用言語が，家庭の使用言語以上に速い速度でスワヒリ語に移行してきていることの現れであろう。

民族コミュニティでスワヒリ語が用いられるのは，日常の会話だけではなく，民族の文化・伝統活動においても同じである。マテンゴ人の太鼓踊りでのひとつである「キホラ」[6]では，かつてはすべてマテンゴ語で歌が歌われていたということである。しかしながら1994年に行なわれたこの調査では，録音した25曲のうち，スワヒリ語で歌われていたものが19曲，マテンゴ語で歌われていたのが1曲，スワヒリ語とマテンゴ語が混在したものが5曲という結果であった。

2.2.2. 言語運用能力

領域の縮小と使用の減少にともなって，民族語の運用能力も当然ながら影響を受けている。表4は，中年層と若年層のマテンゴ語の運用能力について，それぞれひとつ上の世代

[6]男性の太鼓に合わせて女性たちが歌い踊るという太鼓踊りで，6月から8月にかけて行われる。人々の間で「伝統行事」と認識されているのは，「自分たち独自のもの」あるいは「自分たちに起源がある」と考えられている行事であって，必ずしも長い歴史を持っているわけではない。キホラの起源はマラウィ湖沿岸に住むニャサ人にあると言われているが，マテンゴ人は自分たちの伝統行事としてこれを捉えている。歌の内容は農作業を励ます歌，収穫の喜びを表わす歌，亡くなった人に捧げる追悼の歌など多彩である。

からの評価をたずねた結果である。

＜表 4： 地域／世代別に分類した中年層／若年層のマテンゴ語の運用能力に対する一世代上からの評価 （%）＞

	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	中年層に対する評価			若年層に対する評価		
			ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体
よく知っている	48	72	66	100	83	30	45	38
まあまあ	21	19	22	0	11	20	37	28
あまり知らない	31	9	12	0	6	50	18	34
計	100	100	100	100	100	100	100	100

世代別に見ていくと，リテンボの中年層は，全員がマテンゴ語を熟知している。ンビンガでは，熟知している割合はリテンボとの間に大きな差があるが，「まあまあ」知っているものまで含めれば 90%近くがマテンゴ語を知っていることになる。それに対して若年層は，リテンボでは 80%以上がマテンゴ語を知っているものの，ンビンガでは半数がマテンゴ語を「あまり知らない」という結果である。「あまり知らない」というのは，マテンゴ語を理解はできるが話せない，という場合が多い。つまり，ンビンガではすでに若者の半数が自分たちの民族語であるマテンゴ語を話せなくなっているということである。子供のときにマテンゴ語が家庭の使用言語であった中年層の場合とは異なり，若年層には，マテンゴ語を日常的に使っていたことがまったくないという被験者も（とくにンビンガでは）少なくない。従って，中年層のマテンゴ語運用能力の低下が使用の減少によって引き起こされているのに対し，若年層の場合には，マテンゴ語が十分に習得されていないことが運用能力の低さの大きな原因であると思われる。

地域別に見ると，リテンボの人々のマテンゴ語運用能力はンビンガの人々よりも全体的にかなり高いことがわかる。若年層でも家庭におけるマテンゴ語使用がンビンガより多い分，マテンゴ語も習得しているものと思われる。しかしながら，若年層のマテンゴ語運用能力が低下しているという状況に変わりがあるわけではない。若年層のマテンゴ語を「よく知っている」割合は，中年層の半分にも満たないのである。ンビンガに比べればゆっくりとした速度ではあるが，リテンボにおいても若者のマテンゴ語運用能力は確実に低下してきていると言えよう。

2.2.3. スワヒリ語からの借用語

スワヒリ語の影響によって，マテンゴ語の運用能力が低下しているだけでなく，マテンゴ語自体も変化してきている。この傾向は語彙に関して特に顕著である。現在話されてい

るマテンゴ語，特に中年層以下の年代の人々が話すマテンゴ語の中には，頻繁にスワヒリ語の単語が聞かれる。無意識のうちにスワヒリ語が混ざってしまっている場合（code-mixing)もあるが，意識して「借用語」として用いている場合が多い。スワヒリ語からの借用語として用いられている語は，同義のマテンゴ語の単語がないものと同義のマテンゴ語の単語があるものに分けられる。以下それぞれの借用語について述べる。

2.2.3.1. 同義のマテンゴ語の単語がないもの

スワヒリ語からの借用語には，まず，もともとマテンゴ人の社会になかったものに対する借用語がある。これは生活や社会の変化に伴なって，新しい概念や物が，それらの呼び名と共に入ってきた場合である。かつては，マテンゴ人の社会にないものを表現するために近隣の諸言語から借用されることもあったようだが，現在ではそのような場合はすべてスワヒリ語から借用されている。以下，左側がマテンゴ語，（ ）はスワヒリ語である[7]。

1) likalatâsi	「紙」	(< karatasi)
2) ligasêti	「新聞」	(< gazeti)
3) -héndɛsa	「運転する」	(< -endesha)

次に，それ自体はマテンゴ社会にあったけれども，その表現がマテンゴ語にはなかった，という場合である。

4) -tɛ́ga	「呪いをかける」	(< -tega)
5) ṇsêli	「米，飯」	(< mchele)

例えば，マテンゴ語には「呪う」という総称はなく，呪いの種類によって，それぞれ個別の表現が用いられる。現在も呪いの種類によって個別の表現は用いられているが，同時に，総称としてスワヒリ語からの借用語 -tɛga[8] が用いられる。またマテンゴ語には受け身表現がないにも拘わらず，スワヒリ語の -tegaの受け身形 -tegwaを借用して，-tɛgwaとい

---

[7] マテンゴ語の表記は本論文の表記法（3.5.参照）によるが，（ ）内のスワヒリ語は，タンザニアで用いられているスワヒリ語正書法による。以下同様。

[8] スワヒリ語で -tega は「罠や仕掛けをかける」という意味である。マテンゴ語では「呪いをかける」という意味で用いられる。マテンゴ語で「罠を仕掛ける」は-pendakelaである。

う動詞が，呪いをかけられた人を主語にして用いられている。

これとは逆のパターンで，個別表現にスワヒリ語からの借用語が用いられている場合もある。英語の rice と同じように，マテンゴ語では元来，稲，米，飯，の区別をすることなく，すべてmpoŋgaという単語で表わされる。現在でも総称としてはmpoŋgaが用いられているが，区別する必要がある場合には，「料理していないmpoŋga」，「料理した mpoŋga」などと説明的に表現する代わりに，スワヒリ語からの借用語で，nsêli「米」，wâlɛ「飯」と表現される。

このように，個別表現は存在していたが総称表現は存在しなかった場合，また逆に，総称表現は存在していたが個別表現が存在しなかった場合，これらの場合には相補分布的にその両方の単語が用いられている。

2.2.3.2. 同義のマテンゴ語の単語があるもの

次に同じ意味を持つマテンゴ語の単語が存在している場合の借用語である。特に若者に見られる現象であるが，同義のマテンゴ語の単語がある場合でも，スワヒリ語の単語をマテンゴ語の音韻体系に沿って音韻変化させたものを用いる。年配の人々はそれらの単語を「マテンゴ語」としては認めていないようであるが，若者はそれらの単語をすでに「借用語」として定着させている。このような借用語が用いられる場合，それに対応する元来のマテンゴ語の単語を知らないか，知っていてもあまり馴染みがないということが多い[9]。

同義の単語がある借用語のなかには，意味による使い分けがなされている場合もある。

使い分けがなされているもの

6) -bǫ́la と -púndisa (< -fundisha) 「教える」
7) îkakala と upîpu (< uvivu) 「怠惰」
8) -lóba と -sálila (<-sali) 「祈る」

使い分けがなされていないもの

9) líhɛŋgu と kâsɛ (< kazi) 「仕事」
10) -tɔ́nda と -sɔ́ka (< -choka) 「疲れる」

---

[9] マテンゴ語の音韻体系に沿って音韻変化させたスワヒリ語の単語を「新しいマテンゴ語」（スワヒリ語で cha kisasa），それに対して，従来からのマテンゴ語を「昔のマテンゴ語」（cha zamani）あるいは「奥深いマテンゴ語」（cha ndani）と区別されることが調査の間に何度もあった。

例６の「教える」という動詞の場合，「しつけ」や「伝統」などを教える場合には，元来のマテンゴ語の単語 -bǫ́laを用いる。一方，学校など公の場での教育についてはスワヒリ語からの借用語の -púndisa を用いる。また例７のように，同じ「仕事をなまける」という場合でも「疲れたから」「暑いから」といった理由があって仕事をしたがらない場合には，元来のマテンゴ語 íkakalaが用いられ，理由なく怠惰な場合は，スワヒリ語からの借用語 upîpuが用いられる。例８の「祈る」という単語の場合は，マテンゴ社会の伝統神に祈るときはマテンゴ語の -lóba，キリスト教の神に祈るときはスワヒリ語からの借用語 -sálila といった使い分けがなされている。他にも，例えば籠は，草で編んだ籠であればそれぞれその大きさや形によって，もともとあるマテンゴ語の単語を用いて表現されるが，プラスチックでできた籠には，形状や大きさに関係なくスワヒリ語からの借用語 kikâpu が用いられる。器などの場合も同様で，土でできているものはもともとのマテンゴ語の単語，ホーローやプラスティックの場合にはスワヒリ語からの借用語が用いられる。

しかしながら，使い分けがなされているものとなされていないものの境界は，実際には，かなり曖昧である。インフォーマントによれば，「使い分けがなされていないもの」にあげた「仕事」を表わす単語は，かつては，スワヒリ語からの借用語 kâsɛは，仕事場に出向く仕事に限られて用いられていて，家事などの労働を含む líhɛŋguとは区別されていた。けれども，現在これらの単語は区別されることなく用いられている。その違いを説明してくれた年配者も例外ではない。このことからもわかるように，現在使い分けがなされている単語も徐々にその使い分けが曖昧になり，「使い分けがなされていないもの」に移行している現状である。そして使い分けがなされていない場合，次第に借用語のほうが，一般的に用いられるようになる傾向がある。「疲れる」を表わす単語は，もともとのマテンゴ語の単語である -tónda を用いているのは現在ごく一部の人たちだけで，スワヒリ語からの借用語である -sóka のほうが日常的に用いられている。つまり「使い分け」というのは，マテンゴ語の単語からスワヒリ語の単語に取り替えられる途中経過であると言えよう。

使い分けがなされている場合，よりフォーマルなもの，あるいは工場生産のものや素材が現代的と言われるものに対して，スワヒリ語からの借用語を用い，どちらかと言えばインフォーマルなもの，あるいは古くからある素材で作られたものなどに対して元来のマテンゴ語の単語をあてるという傾向がみられる。このような使い分けは，一見，新しいものがその名前と共にマテンゴ社会に入ってきて，２種類の単語が相補分布的に用いられている 2.1.3.1.の例と同じようにも見えるが，実際には，これらの間には違いがある。新聞や紙などの借用語は，新しい物が入ってきたとき，その新しいものをマテンゴ社会既存のものと同定されることなく，初めから別の「新しいもの」として認識されている。それに対して，既存のマテンゴ語との使い分けがなされているものは，初めはマテンゴ社会既存のも

のと同定され，その後使い分けが始まっている。これは，現在使い分けがなされている例5～7，籠や器などについて，「昔はすべてマテンゴ語の単語を使っていた」という多くの年配者の証言にも裏付けられる。

以上のことは次のようにまとめられる。すなわち，もともとマテンゴ語に同義の単語がなかった場合には，似たような表現があったとしても，それらは相補分布的に住み分けをし，両方が用いられている。一方，マテンゴ語に同義の単語がある場合には，「使い分けることによって両方が用いられる」という時期を経て，次第にマテンゴ語の単語のほうが姿を消し，もっぱら借用語のほうが用いられるようになる，という流れが見られる。現在では，マテンゴ語の単語を覚える前にスワヒリ語の単語を知る場合も多く，このような状況はさらに進んでいくものと思われる。

2.2.4. 言語意識

表5は，「マテンゴ語を話せるということはマテンゴ人にとって重要だと思いますか」という質問に対する回答である。ンビンガで75%，リテンボで80%の被験者が「はい」の回答であるから，全体的に見れば，マテンゴ語が自分たちにとって重要であるという意識は強いと言える。

＜表5a：「マテンゴ語を話せるということはマテンゴ人として重要だと思いますか」に対する回答（%）＞

	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	年配層			中年層			若年層		
				ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	全体
はい	75	80	77	78	100	89	55	73	64	92	66	79
いいえ	25	20	23	22	0	11	45	27	36	8	34	21
計	100 (45)	100 (50)	100 (95)	100 (9)	100 (10)	100 (19)	100 (11)	100 (11)	100 (22)	100 (25)	100 (29)	100 (54)

「はい」の回答が最も多いのは，リテンボの年配層である。村落部の年配層がもっとも伝統を維持しているというのは一般的な傾向であり，十分推測のできる結果であろう。しかし，それに続くのは，その対極とも言えるンビンガの若年層である。彼らの半数がマテンゴ語を話せない（2.2.2.参照）という事実を考えると，この結果は意外である。以下この現象について考察する。

まず若年層を除いた回答を概観すると，言語使用（2.2.1.），言語運用能力（2.2.2.）に見られる傾向と同じ傾向がここにも見られることに気づく。つまり，マテンゴ語が話せることを重要だと意識している割合は，①ンビンガよりリテンボで高く，②中年層より年配

層が高い。これは被験者の生活とマテンゴ語との密接度がそのまま反映している。言い換えれば，“近代的”社会との係わりが深ければ深いほど，マテンゴ語は重要視されなくなっていくということである。

＜表 5b：表 5a の若年層の回答の下位分類（%）＞

	20 代		中学生		小学生	
	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ	ﾝﾋﾞﾝｶﾞ	ﾘﾃﾝﾎﾞ
はい	80	56	100	90	90	50
いいえ	20	44	0	10	10	50
計	100	100	100	100	100	100

さて，表５b は若年層の回答を下位分類したものである。表５a で「はい」の回答が 66% しかなかったリテンボの若年層であるが，中学生だけを見てみると 90%が「はい」の回答である。調査を行なった中学校はすべて全寮制中学で，被験者は休暇中以外はマテンゴ・コミュニティの外で生活している生徒たちである。こうして見ると，若年層の「はい」回答は，マテンゴ語をあまり知らない者およびマテンゴ・コミュニティを離れている者に多いということになる。これは，年配層/ 中年層に見られた傾向に反しているように見えるが，次のような解釈が可能である。つまり，マテンゴ語を話せるものにとって，それは民族として「重要なこと」というよりは「あたりまえのこと」である。従って，マテンゴ語は，話せること自体に価値や意味がある言語として意識されている訳ではない。スワヒリ語を威信のある言語として習得してきた世代であれば，それはなおさらである。マテンゴ語を重要視する度合は，生活言語としてどれだけ被験者と係わっているかが問題になってくる。しかしながら，マテンゴ語を話せない者にとって，マテンゴ語が話せることは「当然のこと」ではなく「意味のあること」として意識される。マテンゴ語をあまり知らない者にとっては，運用能力の低下が進む中で，ある種の危機感から（この危機感自体が意識されているかどうかはともかく），それは「民族にとって重要なこと」と意識されるようになる。また，マテンゴ・コミュニティを離れて生活している者は，能力的にではないが，環境的にマテンゴ語が話せない状況にある。彼らは他民族の中にあって自分の民族を再認識するであろうから，民族語を含む自らのエスニシティに関する事柄を敏感に意識するようになる。これらの意識が，若年層の「マテンゴ人にとってマテンゴ語が話せることは重要である」という回答に現われていると考えられる。「マテンゴ語を話さない」ということを自ら選択できるのではなく，能力的にであれ，環境的にであれ，「マテンゴ語を話せない」という状況に置かれている被験者ほどマテンゴ語を民族のアイデンティティとして意識する傾向があると言えるだろう。

2.2.5. 現状の位置づけ

調査結果が示しているように，マテンゴ語が優勢言語となるのは，家庭においても民族コミュニティにおいても，年配層が加わる会話のみである。ンビンガのマテンゴ・コミュニティでは，マテンゴ語が優勢でないというだけでなく，すでにスワヒリ語が優勢言語となっている。スワヒリ語とマテンゴ語は，もはやそれぞれの使用領域を相補分布させているという状況ではない。民族語の領域として「最後の砦」ともいえるこれらの領域においても，使用言語は，中年層以下の世代を中心に，マテンゴ語からスワヒリ語に確実に移行してきている。

多言語コミュニティにおいて，使用されている言語が維持されるのは，ダイグロシアである場合，言い換えれば，それぞれの言語の使用領域が，競争や摩擦なく保持されている場合であると言われている（Fasold 1984:213, Mekacha 1993:108 他）。使用言語の境界線が曖昧になり，使用領域が保持されなくなった言語は他の言語に取って代わられていくのが多言語コミュニティの一般的な現象である。マテンゴ・コミュニティにおいて，マテンゴ語は，「領域の保持」という言語維持の必要条件を備えていないということである。

さて，マテンゴ・コミュニティのこのような状況は，タンザニア全体の民族語の状況を考えるとき，どのように位置づけられるであろうか。マテンゴ・コミュニティは，スワヒリ語が浸透しにくいと言われる条件[10]を抱えており，タンザニアの他の民族に比べてスワヒリ語の浸透が特に進んでいるということはない。また，Brauner et al.（1978）[11]の行なった言語使用の調査によると，70%以上のマテンゴ人が家庭では民族語のみを用いると答えており，これはタンザニア全体の平均 60%を上回っている。つまり，これまで見てきたマテンゴ語の状況は，タンザニアにおいて決して例外的なものではない。むしろ民族語を維持しているとされていたコミュニティでさえこのような状況にあるということから，これはタンザニアの大半の民族語が現在直面している状況であると推測される。

---

[10] スワヒリ語が浸透しやすい条件として1）沿岸部，2）イスラム圏，3）都市部，4）バンツー系民族，があげられる。（Heine 1976, Polomé 1980, Barton 1980 他）ンビンガ県は内陸部に位置し，マテンゴ人のほとんどがキリスト教徒である。また 1988 年の国勢調査では，ンビンガ県には「urban」と分類された地域はなかった。都市化が最も進んでいる県庁所在地のンビンガが「semi-urban」と分類されている他はすべて「rural」と分類されている。

[11] この調査はひとつの民族を対象としているのではなく，45 の異なる民族を対象に行われた言語使用に関する調査である。それぞれの民族の本拠地で調査が行われたのではないので，各民族の被験者について，人数が少ない上に「それぞれの民族コミュニティを離れて高等教育を受けているエリート」に限定されているという問題点は残るが，民族別の言語使用が報告されている貴重なデータである。

2.3. タンザニアの言語政策

2.2.では，マテンゴ語をはじめ，タンザニアの多くの民族語が直面していると思われる言語状況について述べたが，この節では，その状況の背後にあるタンザニアの言語政策について述べる。

2.3.1. スワヒリ語に対する政策

タンザニアにおけるスワヒリ語の浸透には，さまざまな要因がある。タンザニア全人口の約95%がスワヒリ語と同じバンツー諸語を母語としている民族であるため，ほとんどのタンザニア人にとってスワヒリ語は習得しやすい言語であること，また，それぞれの民族の人口が比較的少なく，人口比率の上で他を圧倒するような民族が極めて少ないこと[12]など，スワヒリ語が浸透しやすいと考えられる民族構造をしている。またスワヒリ語が植民地時代以前から通商用リンガフランカとして用いられていたこと，植民地政府やキリスト教宣教団の支配言語として用いられていたことなど，歴史的背景も大きく関与している。しかし，スワヒリ語が著しく浸透し始めたのが1960年代の終りから1970年代にかけてであるということ（Mekacha 1993:81-83）から考えると，これらの要因だけではなく，独立以降徹底して行われてきたスワヒリ語普及政策がなければ，現在のような状況はありえなかったと思われる。

タンガニーカ[13]は，ベルリン会議においてドイツの植民地支配下におかれ，第一次世界大戦でドイツが敗れてからは，イギリス領東アフリカに組み込まれることになった。両国の植民地言語政策は異なっていたが，支配のためにスワヒリ語を必要とした点は共通していた。そのため，スワヒリ語の標準化，正書法の確立，識字教育の基盤作り，といったスワヒリ語の「整備」は，植民地政府によって独立前から行なわれてきていた。

支配言語としてすでに整えられていたスワヒリ語を，ＴＡＮＵ（Tanganyika Africa National Union，タンガニーカ・アフリカ人民族同盟，現ＣＣＭ：Chama cha Mapinduzi，革命党）は独立に向かう国民国家としてタンガニーカを統一するための重要な手段として用いた。スワヒリ語は，多民族社会におけるコミュニケーションの道具であると同時に「統一のシンボル」であった。つまり，「支配の言語」であったスワヒリ語は，「独立の言語」

---

[12] 支配的になる程の人口をもつ民族グループが存在すれば，多くの場合その民族の言語も支配的になる。そしてそのような民族にとっては支配的である自分たちの言語以外の言語を習得する動機づけが小さく，国家語や公用語の浸透は遅れる傾向にある。

[13] タンザニアは，1964年に大陸部のタンガニーカと島嶼部のザンジバルが合邦してタンザニア連合共和国となった。ザンジバルでは元来スワヒリ語が話されていた。

として用いられることになったのである。

スワヒリ語は，独立をはたした1961年に「国家語」として定められた。スワヒリ語はタンザニアにとって国民国家のナショナル・アイデンティティであり，その発展と普及は国家統一に不可欠なものであると考えられていた。スワヒリ語を「発展」させるために，スワヒリ語研究所や国語審議会といった組織が設立され，ダルエスサラーム大学にはスワヒリ語学科が設置された。これらの組織ではスワヒリ語の「整備」だけではなく，スワヒリ語教師の養成，テキストの編纂などにも力が注がれた。普及のために教育は極めて重要である。初等教育では，媒介言語をスワヒリ語に統一すると同時に教科としてもかなりの時間数をあてるカリキュラムが組まれた。また成人を対象にしたスワヒリ語の識字教育も始められた。アルーシャ宣言[14]が行なわれた1967年には，スワヒリ語は英語とともに公用語とされ，政府はそれぞれの言語の使用領域を明確にした。英語は高等教育と最高司法機関，スワヒリ語はそれ以外のあらゆる公的機関及び公的場面での使用言語として定められ，行政をはじめとする公的な場でのスワヒリ語の使用はさらに徹底された。

このようにスワヒリ語普及の政策は，スワヒリ語の整備充実，スワヒリ語使用の徹底，人々へのスワヒリ語習得の動機づけ，といった多方面から推し進められてきた。現在の状況は，これらの徹底した政策が，スワヒリ語が浸透しやすい基盤のもとに効果的に働いた結果であると言えよう。

2.3.2. 民族語に対する言語政策

タンザニアの言語政策の中心はスワヒリ語の推進と英語に対する対応であって，民族語に関してはほとんど注意が払われていない。民族語に対して公的になされている言及は，①民族語はスワヒリ語の語彙補充源である，②民族語は国の文化遺産である（Khamisi 1974:300），という２点に限られる。

民族語に与えられている唯一の具体的な役割は「スワヒリ語の語彙補充源」である。これはスワヒリ語の語彙を補充するにあたってたてられた，「諸外国語から借用するよりもまず，可能な限り他のバンツー諸語から補充されるべきである（Abdlaziz 1980:161）」という方針である。国家語としてスワヒリ語の使用を拡大していくためには語彙の整備補充が必要であった。その際，まずスワヒリ語の古語，あるいはスワヒリ語の他変種を見直すところから始めたが，他言語から語彙を借用する場合，その借用源となる言語の優先順位

[14] 1967年２月にタンザニアの当時の大統領ニエレレが行なったタンザニアの社会主義宣言。TANUの基本政策を示したもので，その中で「自助のイデオロギー」が打ち出された。このことはタンザニアの「自国の」言語であるスワヒリ語の発展と普及の重要性を国民に更に意識させることになったと思われる。

は，１：他のバンツー諸語（すなわち民族語），２：アラビア語，３：英語，と定められた。この方針のもとに，独立以降数年の間にかなりの語彙が民族語からスワヒリ語に新しく加えられている（Abdlaziz 1980:161）。

しかしながら，スワヒリ語の語彙の補充源という役割は長期的ではない。確かに現在も学術用語を中心にスワヒリ語の語彙は補充される必要があり，その補充源に対する国語審議会の方針は上に示したものとほぼ同じである（Mwansoko 1989:136）。しかし現在スワヒリ語が必要としているのは，西洋諸国で発達してきた学問に用いる専門用語や，諸外国語で表わされている「近代的な」概念を表わす用語であって，そのような用語を民族語から補充するというのは現実的ではなく，実際にはほとんど英語から借用されるか，あるいは意味翻訳が行なわれている。

「国の文化遺産」という位置付けについてはどうか。この位置付けを見る限り，政府は民族語の存在を肯定的に捉えているように見える。しかし民族語が使用されるべき領域や場面が示されていない上，具体的に民族語を「国の文化遺産」として保護あるいは継承していくという政策もまったくたてられていない。それどころか 1984 年に当時の大統領ニエレレは，「最終的に民族語が消失してしまうことがスワヒリ語の進展による影響のひとつであったとしても，それは遺憾なことではなく当然の展開である」と演説のなかで述べている（Batibo 1992:93）。

民族語に象徴される各民族独自の文化・伝統は，タンザニアの国家としての財産でもある。その伝統こそが確固たるナショナル・アイデンティティを形成するのであるが，一方で，民族意識が強調されることによって国家統一が妨げられることになりかねないという心配もある。このジレンマは民族語の使用に対して政府に不明確な態度をとらせている大きな要因であろう。1990 年代に入って新しく提案された言語政策においても，民族語に対する認識は独立当時のものとほとんど変わらず，政府の態度は相変わらず明らかにはされていない。

このように，政府は，民族語の使用について禁止することも奨励することもしないという曖昧な態度をとりつづけてきた。そしてこれは，結果的には民族語の維持を支持しないという政策をたてたのと同じ状況を導きだしたことになる。

2.4. 言語状況に対する話者の意識

以上述べてきたように，タンザニアの民族語は，その維持を考えるならば決して楽観視できない状況にある。それではこのような状況を人々はどのように捉えているのだろうか。

ある言語が支配的になるのは，その話者グループが支配的になった結果である場合が多い。支配の一貫として支配者側の言語が被支配者側に強要される場合である。植民地や少数民族に対して現在も世界のあらゆるところで行われているこのような言語の強要は，まさしく民族アイデンティティを侵し，その民族の文化を侵略するものである。けれどもタンザニアにおけるスワヒリ語の場合，スワヒリ語話者グループが他民族を支配しているのではなく，人々にとってスワヒリ語は民族的に中立的であると考えられている。

独立期まで内陸部では，スワヒリ語に対して否定的なイメージがあったが，スワヒリ語の使用が増すことで，スワヒリ語の文化的側面より機能的側面が重視されるようになり，それも次第に薄らいできた。スワヒリ語は「沿岸部の言語」から「タンザニアの言語」として捉えられるようになってきたのである。このためスワヒリ語の浸透に対して，強要，侵略といったイメージは希薄である。それどころか 130 以上の多民族からなるタンザニアが民族紛争を起こさないのはスワヒリ語という共通の言語をもっているからである，という意見は政府関係者からだけではなく一般の人々からも頻繁に聞かれる。現在アフリカで起きている紛争を見ると，言語が違うことが必ずしも紛争の原因には関係していないことがわかるが，独立期に政府によって示された「スワヒリ語による国家の統一」という信仰は広く行きわたっている。

このように，言語政策や現在の言語状況に対する際だった反発は現在のところ見られない。タンザニアの言語政策が最も評価されるべき点は，人々にこのような意識を持たせることができたということであろう。民族語に対してスワヒリ語の語彙補充源という役割と国の文化遺産という「地位」を与えること，また公的にその使用を禁止することはしなかったこと[15]は，スワヒリ語の勢力拡大に対する国民の否定的な感情を最小限にとどめたと思われる。

しかしながら，民族語使用の縮小や運用能力の低下がさらに進み，民族語維持の問題が深刻化してきたとき，人々はスワヒリ語の勢力拡大にどこまで寛大でいられるであろうか。スワヒリ語に対する感情には民族によって差があるが，自分たちの生活にスワヒリ語が不可欠であるという考えは共通している。比較的スワヒリ語に対して批判的である人々であ

---

[15] 政府としてはあくまでもスワヒリ語の使用領域を定めたにすぎず，民族語の使用を禁止したわけではない。しかしながら，実際にはスワヒリ語の使用を徹底させるために，民族語を使用した者に体罰を加えるといった「スワヒリ語強要」が，小学校などでは少なからず存在していたようである。

っても，タンザニア全土に普及しているスワヒリ語の価値は認めている。同時に，スワヒリ語に対する意識に関係なく，自分たちの民族語が死滅してしまうことは許されないという考えも共通している。自分たちの日常生活言語として民族語がスワヒリ語に取って代わられることを問題としない人々であっても，民族語は守るべき自分たちの文化遺産であるという意識は強く， ニエレレが言うように，自分たちの民族語が死滅してしまうことをスワヒリ語の進展の当然の展開であるとは考えてはいない。

タンザニアの民族語は言語維持の条件を失ってきてはいるものの，現在はまだ，年配者や村落部の人々が民族語を話せる状況であって，民族語存続の危機を一般の人々が具体的に意識する段階に至ってはいない。しかしながら，人々の意識が今後の民族語の状況によって変わっていくことは十分に考えられる。マテンゴ語に対する若者の意識調査では，「マテンゴ語を話さない」ということを自らが選択できるのではなく，能力的，あるいは環境的に「マテンゴ語が話せない」という状況に置かれている被験者ほどマテンゴ語を自分たち民族のアイデンティティとして重要視するという傾向が見られた。これは，そのことを暗示する興味深い結果である。